

# アイリス・マードック『何か特別なもの』におけるモラル

木内 英太\*

## 序

アイリス・マードックは、多くの長編小説のほかに哲学的著作、戯曲、詩も執筆して多作な作家であるが、その生涯において短編小説を一編だけ執筆していることはあまり有名ではない。<sup>(1)</sup> その唯一の短編『何か特別なもの』(“Something Special”)は、その知名度にもかかわらず現代イギリス短編小説の代表作の一つと評価する意見がある。<sup>(2)</sup>

アイルランドで暮らす24歳のイヴォンヌ・ジアリがその主人公である。イヴォンヌは、ユダヤ人青年サムとの結婚を母と伯父に勧められるが、サムには何か特別なものがない、と言って彼を受け入れない。サムとイヴォンヌが外に出かけて、いくつかのエピソードがある。そしてサムが、もう家に帰ろうとする彼女に特別なものを見せたがるのでついていくと、朽ち果てた倒木が横たわっているだけであった。イヴォンヌは泣きだして家に帰り、母親にデートの首尾を聞かれて特別なことはなかったと答えるが、サムとの結婚を受け入れる。神話性やシンボリズムを否定し、「メロドラマ性、パノラマ性、プロット性」を重視するマードックらしい作品である。<sup>(3)</sup>

短編だが、アイリス・マードックの長編小説の特徴である「理性では解決できない現実や、それに対抗できない現代人の苦悩する姿」が描かれている。<sup>(4)</sup> ジェイムス・ジョイスの初期のリアリズム作品の影響下に書かれたとされることに頷ける

結末である。<sup>(5)</sup>

本論では、あまり論じられることのない『何か特別なもの』において、マードックが文学作品で表現しようとしているモラルがどのように描かれているかを、マードック自身の哲学、そして「倫理について思索を深めてきた哲学者」であり、「おそらく、現代思想におけるただ一人のモラリストである」エマニュエル・レヴィナスの概念を援用して考察する。<sup>(6)</sup>

## 1. マードックの哲学の反映

『何か特別なもの』には、暗い印象にもかかわらず、結末に明るい兆しを読み取る解釈が多い。例えば「サムの求愛を受け入れるイヴォンヌの胸に、ただ諦めとだけは言い切れない、ほのかな曙光が滲んでいるように感じられるのは、マードックのイヴォンヌに寄せる情愛ゆえか、あるいは現実こそすべて、というマードックの考えゆえであろうか」といった読み方である。<sup>(7)</sup> この様な読み方が一般的なのは、マードックが小説を書くだけでなく、大学で哲学を専攻して、のちに母校で哲学を教えながら哲学的著作を執筆しており、両者が密接な関係にあるからだ。

アイリス・マードックは、プラトンの「洞窟の比喩」をしばしば引用しており、人間が幻想によって目を曇らされ、いかにして幻想により墮落するかを考察してきている。‘Metaphysics and Ethics’において、“Man is a creature who makes pictures of himself, and then comes to resemble the picture”と強調している。<sup>(8)</sup> 評論“Against Dryness”においても、「現実が「還元不可能性」と「偶然性」にみちた不透明な存在で

2014年11月30日受付

\* 江戸川大学 マス・コミュニケーション学科准教授 英文学、現代文化

あり]、「人間は自我の幻想によって目を曇らされ、正しく他者や現実を眺めることが出来ない」と述べている。<sup>(9)</sup>

マードックは、人間は自我の幻想によって目を曇らされるので、偶然性に満ちた現実を眺めることを求めている。

'If there is any kind of sense or unity in human life, and the dream of this does not cease to haunt us some other kind must be sought within human experience which has nothing outside it.'<sup>(10)</sup>

『何か特別なもの』に明るい兆しを読み取るのは、この短編小説に、哲学者であり小説家であるマードックの思想が端的にあらわされていると考えるからである。サムとの結婚を決意するイヴォンヌは、その決意によって、幻想への逃亡を避けて、現実を見据えるようになっていくと解釈するのである。

また、マードックは、悲劇を厳密には文学の領域であるとして、現実が悲劇よりも複雑で不条理であると述べている。

Strictly speaking, tragedy belongs to literature. Tragedies are plays written by great poets. One might say of the Iliad that, in a supreme scene, it rises to a tragic level, which no prose work can reach. But it is too long and multiform to be a tragedy. There are no prose tragedies.<sup>(11)</sup>

マードックは、散文では悲劇は描けないと考えているので、短篇小説の結末を悲劇とはとらえられない。彼女は、現実を個人の認識を超えた不条理さ、「悲劇」という枠組みに収まりきれない、表現しきれない何か、としている。マードックは長編小説を多く書いており、そこでは文学的な定型化した「悲劇」を超えた、穴がいくつもあいているような特定されない部分を含めた現実を描こうとしている。

Real life is not tragic. In saying this one means that the extreme horrors of real life cannot be expressed in art. (This relates to why religion lies beyond art.)<sup>(12)</sup>

マードックの述べているモラルとは、自分自身を「悲劇」として幻想にとらわれずに、芸術では描ききれない世界の不条理さに気がつくことである。マードックの長編小説では多数の登場人物が互いにかかわり合い、どの人物にとっても思い通りに話が進まないことで不条理さを表現しているが、登場人物も話の転換も少ない短篇の『何か特別なもの』にもそれが表わされている。

『何か特別なもの』の結末部分は以下である。

「何でもないの」とイヴォンヌは言う。「何でもないの」彼女はシーツの間にもぐりこみ、ベッドの真中へ体をすべり込ませる。

「お前にも手を焼くよ」と母親は言う。「どうしても、打明けたくないのかい？」

「ええ」とイヴォンヌは言う。「悲しい話なのよ」そして彼女は付加える。「とても悲しい話」彼女はもう口をつぐみ、それ以上どうしても語ろうとしない。

とうとう、店も奥の部屋も、ひっそりと静まりかえる。もう明日までは、通り過ぎる電車もない。イヴォンヌ・ジアリは顔を深く枕に埋める。そう、彼女がこれから泣き出そうとしている気配が母親に判らないくらい深く。

長い夜が始まろうとしている。<sup>(13)</sup>

イヴォンヌ・ジアリが枕に顔を埋め、長い夜を過ごそうとする最後のシーンは、メロドラマ的な解釈では、イヴォンヌの理想とは程遠い凡庸なサムと結婚するという「現実」を受け入れたイヴォンヌが、自らの運命を呪い泣くといった感情的な読みとなるのだが、アイリス・マードックの他の小説と同様に、彼女の唯一の短篇小説にも彼女の哲学的考察の反映を読み取ることができる。

## 2. イリヤ

『何か特別なもの』の結末部分を、エマニュエル・レヴィナスの概念を援用して考察する。

レヴィナスは、倫理とは「『聖潔』を識別すること」だと定義する。<sup>(14)</sup> 存在するものは個々の存在者のすべてが自分の存在そのものに専念し、自分の実存にしがみついているが、存在者のうちで人間的なものなかでは、存在論的には不条理な事態が出現する可能性がある。それは、「他者に対する配慮が自己への配慮に勝る」ことであり、レヴィナスはそのことを「聖潔」と呼んでいる。<sup>(15)</sup>

精神分析で言われるように、主体にとって言葉は「他者」であり、レヴィナスは「言葉はつねに他者に向けられています」という。<sup>(16)</sup> 言葉を用いて思考することに、語ることのうちに、具体的な自分以外の人間のことを超えた「他者」のためにという倫理が結節する。

レヴィナスは、名詞的／動詞的という言語的表現を使って、主体に訪れる倫理としての「他者＝言葉」について、次のように述べている。

あらゆる事物、存在、人間の無への回帰ということを想像してみることにしよう。われわれは、純粹な無に出会うのだろうか。このようにあらゆるものを想像のうえで一掃[破壊]した後に残るのは、何かあるもの *quelque chose* ではなくて、イリヤ *il y a* がある、それがそこにもつ＝ある」という事実である。あらゆるものの不在が、ひとつの現前として、つまり、そこですべてが失われてしまった場として、大気の濃密さとして、空虚の充実として、あるいは、沈黙の眩きとして、立ち戻ってくるのだ。事物と存在のこのような破壊の後には、非人称的な〈実存すること〉の「磁場」があるのだ。<sup>(17)</sup>

レヴィナスによると、苦痛とは人称的な存在経験である。存在者、つまり人称を持つ個人の欲望である「何かあるもの *quelque chose*」は、イヴォンヌ・ジアリが望んでいた「何か特別なもの

something special」を示すと言える。それに対して、

非人称の純粹な「存在すること」一般の、つまり *il y a* の経験では、経験する〈私〉という主語＝主体さえもが消滅している。<sup>(18)</sup>

主体が消滅している状態の、非人称の存在をイリヤという。

イリヤとは、「哲学の教科書で語られているような」実存主義の考え方である、知覚が事物を切り取ってくる前の「未分化の基体」のことではない。<sup>(19)</sup> レヴィナスの考えでは、実存者には、「者」である以上、人称がすでに備わっているからである。

ハイデガーは『存在と時間』において、存在する存在である実存者と、存在するという活動そのものを区別している。その区別は、前者は名詞、後者は動詞によって表現されている。<sup>(20)</sup> レヴィナスによると、ハイデガーは「実存すること」は常にだれかある人によって所有されており、実存者なき実存することを認めていないという。

ハイデガーの存在についての思想を継承して批判したレヴィナスは、人称的な存在、存在者が闇に沈んだ時、存在者の「在る」だけが、動詞である「存在する」という活動そのものが、あるという。レヴィナスは主体抜きで生起する「実存すること」、実存者なき実存することという観念を提唱し、「〈実存すること〉は実存しない」と述べる。<sup>(21)</sup>

名詞である「存在するもの」によって繋ぎとめられることのない状況を、想像のうえであらゆるものを一掃した後に残るものが、イリヤである。それをレヴィナスは非人称的な〈実存すること〉の「磁場」と表現している。<sup>(22)</sup>

「『イリヤ』というのはかくかくしかじかのものである」というふうに一義的に定義できない。どのような修辭的技巧をもってしても「イリヤ」の記述には決して成功しないということ、いかなる修辭的技巧をもってしても記述しえないものが「ある（イリヤ）」ということを示す。<sup>(23)</sup>

イヴォンスが夢想していた「何か特別なもの」は見つけることが出来ないまま失われ、何も特別なものがないサムとの結婚を受け入れる。しかし、彼女は「とても悲しい話」をどうしても語ることができない。その夜、一人でベッドに入り「ひっそりと静まりかえ」った暗闇の中で、彼女は、失われた「何か特別なもの」の代わりに、いかなる修辭的技巧をもってしても記述しえないイリヤを見出していると解釈できる。

この短編の結末に明るい兆しを読み取る際に、存在するものにつなぎとめられることのない、匿名的な「磁場」が現れてきていると読み取ることが可能である。

### 3. 眠り

眠りについて、レヴィナスは独自の哲学的考察をしている。

眠るとは心理的身体的活動を中断することである。しかし、抽象的存在は空中を漂うだけで、この中断のための必須条件、つまり場所を欠いている。眠りへの誘いは、横たわるという行為のうちに生まれる。横たわる、それはまさしく実存を場所に、位置に限定することである。<sup>(24)</sup>

環境や背景、あるいは習慣や歴史により、場所は、それぞれが故郷やなじみの場所といった具体性を持つが、眠る際にはその個性が失われ、「〈場所〉のもつ庇護の功德に触れる」ことになる。<sup>(25)</sup>

個性が失われた〈場所〉をレヴィナスは土台といい、そこから意識が出来る。眠りの中で世界が消えたときに、土台との関係からやってくるのが意識である。土台とは身体のことであるが、レヴィナスの考えでは「身体が存在が実体的なものの次元ではなく出来事の次元に属している」。<sup>(26)</sup> 身体そのものが出来事なのであり、横たわり、自己の内に籠ることで意識は「眠りに融即」する。<sup>(27)</sup> 眠ることは土台に身を任せることであり、同時に避難所を得ることであり、眠りがあるからこそ存在は破壊されることなく中断されることになる。

レヴィナスの考えでは、意識の眠りは、ハイデガールの〈ダーザイン[現存在]〉に含まれる〈ダー[現・そこ]〉とは根本的に異なる。<sup>(28)</sup> ハイデガールのダーザインは、すでに世界を巻き込んでいるが、レヴィナスにとって意識は起源であり、いっさいの地平や時間に先立っている。レヴィナスは、存在と存在者の根本的な区別、存在論的差異がハイデガーによって忘却されて、西洋思想はこの忘却のうえに成り立っていると指摘する。<sup>(29)</sup> 存在そのものが自分を忘れさせ、存在は存在を隠蔽しておく。レヴィナスにとっては倫理とは存在よりも古い何かである。眠りは、この存在以前への探求の出発点となる。

意識は意識自身から、土台との「関係」、意識が眠りの中で排他的に結びつく場所とのあらかじめの「関係」から発生する。この関係をレヴィナスは〈ここ〉と呼び、〈ここ〉は主体の出発点になり、主体が根付く。

レヴィナスは眠りの本質を、存在が流動している中で、〈ここ〉という位置に限定されること、定位に求めている。

この定位を「身体」という出来事とみなすとともに、身体はこの定位のうちに、「意識」「内面性」「現在の瞬間」を可能にする土台を見出している。<sup>(30)</sup>

眠りは「死」に向かう方向性を持ち、目覚めは「意識」に向かう。意識は、意識されるものを持つが、それは、意識にとっての「他者」でしかない。目に見えているものは、見られている対象であり、見ている意識にとってだけの「他者」である。

レヴィナスの考えでは、他者との無限の距離、絶対的な他者性が、友愛と歓待と正義の要素、すなわち倫理の起こる根源である。このことをジャック・デリダは以下のように説いている。

たんなる良識とでも言えるようなものに依拠するならば、友愛や歓待や正義は、他者の他者性が、(略)無限の、絶対的で殲滅不可能な他



者性が、計算不可能ではあるけれども、勘定に入れられるところにおいてしか、存在しえませぬ。レヴィナスは、(略)友愛と歓待について語るときに、彼は《善良な感情》に届してはいなかったのです。<sup>(31)</sup>

デリダの言う「《善良な感情》に届く」というのは、マードックが言う「悲劇」という幻想にとらわれることである。いかにも悲劇的な、メロドラマ的なプロットを持つ小説である『何か特別なもの』の主人公イヴォンヌ・ジアリが、そのプロットにもかかわらず幻想から逃れるであろう、という読みができるのは、最後に眠ろうとするシーンがあるからだ。

『何か特別なもの』の最後のシーンで、イヴォンヌは眠りにつこうとするが「長い夜が始まろうとしている。」という最後の一行から、彼女はその後で眠れない夜を過ごすことが分かる。

眠りに逃げ込むことが出来ない状況が、不眠である。レヴィナスは不眠とイリヤを関連付けている。

安眠を妨げ、人称的な「私」を押し潰すイリヤ。存在の純粋な不条理と無意味にただ「耐える」(supporter) こと、〈私〉のみが世界の重みを支えること、それが il y a の倫理的意味である。<sup>(32)</sup>

その経験のひとつとしてレヴィナスは「不眠の夜」を挙げる。不眠は、「それは決して終わることがないだろうという意識」、「もはや自分の捉われている覚醒状態[目覚めている状態]から抜け出るいかなる手だてもない」という意識から引き起こされる。<sup>(33)</sup> そこにくぎ付けになると、「人は自分の出発点あるいは到達点といった考え」を失い、新たに付け加えることがない。不眠を際立たせる外部のざわめき(イヴォンヌの場合はアイルランドの街の騒音)が、イリヤつまり非人称的な実存と似た、永遠性を感じさせる。

イヴォンヌ・ジアリのような女性は数多く存在し、過去にも数多く存在し、未来においても存在

するであろう。読者は、イヴォンヌの個別のエピソードを通じて、今までに何度も繰り返されてきた出来事として抽象化され、実存を読みとることになる。

不眠の夜には、無意識状態に隠れることもできず、眠りに逃げることもできない、「覚醒状態」となる。これは、マードックがよく引用するプラトンの洞窟の比喩での覚醒との関連する、モラルとしての覚醒であろう。この状態では実存はむき出しになる。実存者なき実存することは、自我を失うことである。

逃れられない覚醒状態で、真っ暗闇のなかで「存在者」が闇に沈んだ時、存在者の在るだけが〈私〉なき〈私〉を押し潰す。

「在る」の出口のなさ、永遠性は恐怖として経験される。その一方で、実存者なき実存、そして「〈実存すること〉がそれ自身の無化[消滅]のなかで自らを肯定する仕方」の特徴を示している。<sup>(34)</sup>

イヴォンヌは、現実を受け入れ、サムとの結婚を承諾した。ベッドで泣く彼女には、「存在からの逃走の欲望」があったであろう。しかし、不眠の長い夜を過ごすことは、倫理的な覚醒をもたらす可能性がある。結末まで読み終えた読者は、その可能性を予感するのである。

レヴィナスは「自我が自我としての至高性を脱ぎ捨てると、憎むべき自我という自我の様態の更にその奥で、倫理のみならず、おそらくは魂の精神性をもまた意味する」と述べている。<sup>(35)</sup> その場所、レヴィナスの言葉では〈ここ〉とは、

存在の意味についての問いが成り立つところであり、一切の基準を超えたものであり、「無条件で論理的には識別不能でさえある自我の同一性の頂点」、それは自分が憎むべき自我を打ち明けることもできるのだが、そのような「自己同一的なものの曖昧さとおして、倫理は意味する」のである。<sup>(36)</sup>

自我の様態の更にその奥である〈ここ〉、この「他者」を超えた絶対的な他者は、真に無限なものであり、意識の外部である。無限なものである他者は、レヴィナスが唱える概念のうち最も重要なもののひとつである「顔」である。

他者を想像することは、同情や共感ではない。苦しみや喜びを分かち合うことではない。「顔」に答えることは、「その生存を肯定し生存を分かち合おうとすること」である。<sup>(37)</sup> 生存を肯定し分かち合うのは、時間的、空間的な近さ／遠さとは関係がなく、未来に生まれてくる他者にも等しく言える。

ユダヤ人であるレヴィナスは、自我を中心とする考え方とは別の、ユダヤ教的な超越に倫理性を見出している。

自己自身を絶対的なものの王国の入り口とみなす哲学（略）とは逆に、ユダヤ教はわれわれに超越を教えます。<sup>(38)</sup>

レヴィナスは思考が一義的な言葉の枠組みのうちに固着し、惰性化することを避けようとする。<sup>(39)</sup> そのため彼は、自我を超越することに倫理性を見出すことについて、さまざまに言葉を変えて繰り返し述べている。

倫理、それは超越論的統覚の初源的統一性の炸裂、言い換えるなら経験の彼方なのだ。<sup>(40)</sup>

この倫理感には、マードックが述べているモラルとの共通性がある。芸術によってあらわすことのできない不条理こそ、自我が抱えてしまう基準を超えたものであり、表現することで固着させることができないところに倫理が生じるとするのがマードックの考えである。レヴィナスも、人が何ものの支配者でもないことは不条理のうちにあることであり、「容赦なき、かつまた出口なき存在という概念は、存在の本来的な不条理性を構成している」と述べている。<sup>(41)</sup>

長い夜を過ごすことになるイヴォンヌは、倫理

が「意味する」長い夜を過ごし、そこに倫理性が生じていく。『何か特別なもの』は、レヴィナスが唱える倫理、すなわち、デリダがレヴィナスを評した言葉を用いると「前根源的な根源性」をもつ「倫理の彼方の倫理」を認識するに至る過程を描いている、という読みが可能である。<sup>(42)</sup>

## 結 論

アイリス・マードック『何か特別なもの』のプロットは、短篇であるためシンプルなものであるが、若い女性の主人公が、ファンタジー的な理想をあきらめて平凡な現実を受け入れる、というメロドラマ的な読み方から、マードック自身の哲学的著作で示されている内容に沿った読み方までがされているが、テキストとして、それ以上の倫理性を描いていると読むことが可能である。

## 《注》

- (1) アイリス・マードックの短編小説の存在が知られていないことについては、例えば、「現代の代表的長編作家アイリス・マードックは興味深いことに短編をまったく書いていないのである。」富士川義之「現代イギリスの短編小説について」『集英社ギャラリー「世界の文学」5 イギリスIV』（集英社、1990）pp.1083-1084
- (2) 代表として丸谷オーが挙げられる。「マードックは長篇小説しか書かない人みたいで、短篇小説はこれ一つしかないんじゃないかな。しかしすばらしい出来だから、読んでごらん下さい。」丸谷オー 聞き手・湯川豊『文学のレッスン』（新潮文庫、2013）p.40 「マードックの『何か特別なもの』を読み返してみて、改めてその手法に感心して、（略）」同、p.42
- (3) 野中涼『I・マードック』（研究社、1971）p.24
- (4) 神山妙子『はじめて学ぶイギリス文学史』（ミネルヴァ書房、1989）p.272
- (5) 日本アイリス・マードック学会編『全作品ガイド アイリス・マードックを読む』（彩流社、2008）p.203
- (6) フィリップ・ネモ「はじめに」エマニュエル・レヴィナス 西山雄二訳『倫理と無限 フィリップ・ネモとの対話』（ちくま学芸文庫、2010）p.12  
なお、倫理（ethics）とモラル（moral）の違いについては、アイリス・マードックの一作品の読みの可能性を主題とする本論においては追及しない。
- (7) 日本アイリス・マードック学会編『全作品ガイド アイリス・マードックを読む』（彩流社、2008）p.204
- (8) Iris Murdoch, "Existentialists and Mystics: Writings on Philosophy and literature" (Chatto & Windus, 1997)p.68

- (9) 井内雄四郎『アイリス・マードックの世界』（旺史社、2003）p.47
- (10) Iris Murdoch, "Existentialists and Mystics.: Writings on Philosophy and literature" (Chatto & Windus, 1997)p.365
- (11) Iris Murdoch, "Metaphysics as a Guide to Morals" (Penguin books,1993)p.93
- (12) ibid., p.93
- (13) アイリス・マードック 丸谷オ一訳「何か特別なもの」丸谷オ一編『現代の世界文学 イギリス短篇24』（集英社、1972）p.303
- (14) エマニュエル・レヴィナス 合田正人・谷口博史訳『歴史の不測』（法政大学出版局、1997）p.184
- (15) 同上、p.185
- (16) 同上、p.185
- (17) エマニュエル・レヴィナス 原田佳彦訳『時間と他者』（法政大学出版局、1986）pp.13-14
- (18) 港道隆『レヴィナス 法-外な思想』現代思想の冒険者たち 第16巻（講談社、1997）p.352
- (19) エマニュエル・レヴィナス 原田佳彦訳『時間と他者』（法政大学出版局、1986）pp.14
- (20) 同上、pp.11
- (21) 同上、p.12
- (22) 同上、p.14
- (23) 内田樹『レヴィナスと愛の現象学』（せりか書房、2001）p.52
- (24) エマニュエル・レヴィナス 西谷修訳『実存から実存者へ』（筑摩書房、2005）p.149
- (25) 同上、p.150
- (26) 同上、p.153
- (27) 同上、p.153
- (28) 同上、p.152
- (29) エマニュエル・レヴィナス 合田正人訳『神・死・時間』（法政大学出版局、1994）pp.164-165
- (30) 合田正人『レヴィナスを読む 〈異常な日常〉の思想』（日本放送出版協会、1999）p.122
- (31) ジャック・デリダ 林好雄・森本和夫・本間邦雄訳『言葉にのって』（ちくま学芸文庫、2001）p.95
- (32) 港道隆『レヴィナス 法-外な思想』現代思想の冒険者たち 第16巻（講談社、1997）p.293
- (33) エマニュエル・レヴィナス 原田佳彦訳『時間と他者』（法政大学出版局、1986）p.15
- (34) 同上、p.16
- (35) エマニュエル・レヴィナス 合田正人・松丸和弘訳『他性と超越』（法政大学出版局、2001）、p.44
- (36) 同上、pp.43-44
- (37) 小泉義之『シリーズ・哲学のエッセンス レヴィナス 何のために生きるのか』（NHK出版、2003）p.53
- (38) エマニュエル・レヴィナス 合田正人・三浦直希訳『困難な自由 [増補版・定本全訳]』（法政大学出版局、2008）p.22
- (39) 内田樹『レヴィナスと愛の現象学』（せりか書房、2001）p.103
- (40) エマニュエル・レヴィナス 合田正人訳『存在の彼方へ』（講談社学術文庫、p.337）
- (41) エマニュエル・レヴィナス 原田佳彦訳『時間と他者』（法政大学出版局、1986）p.18
- (42) ジャック・デリダ 藤本一勇訳『アデュー エマニュエル・レヴィナスへ』（岩波書店、2004）p.225